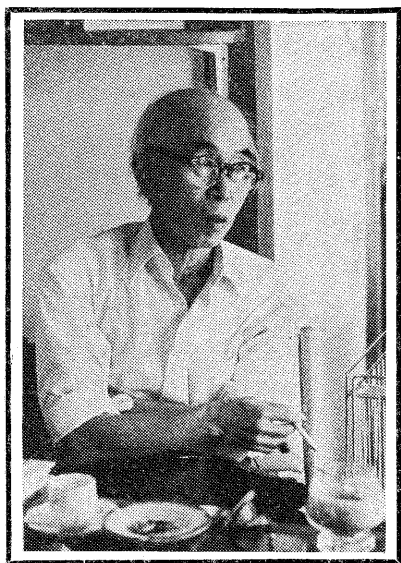


☆講演

三つのこと——育児（育ての心）と教育と救い

——教育をほんとうに新鮮な眼差しで見なおしたい——

周 郷 博



〔故周郷博先生の講演テープを送るに当って〕

高 橋 フ ミ

本誌が今は亡き周郷博先生の平幼稚園での二時間にわたる講演のテープを原稿にして下さったことはありがたいことです。

周郷先生のご永眠は私の心に強い衝撃を与え今も痛手になっています。とても淋しいのです。

ことしの三月末に野辺山で津守先生にお目にかかりました。こらえきれない淋しさをつい津守先生にもりました。駅の待合室の数分間でしたが津守先生が周郷先生の死を悼み惜しまれるお言葉で慰められていました。その時にこのテープを世に出すことを津守先生が勧めて下さいました。平幼稚園のPTAも手もとに死蔵されてしまうことがないことを感謝しています。

昨秋十一月に東北の小さい幼稚園に周郷先生は来て下さいました。著書でだけお慕いしていた私の長い歳月の念願が叶えられたのです。先生の教え子中島弘子先生（彰栄保育専門学校講師）の仲介でした。中島先生は周郷先生の詩「くもさん」に大中恩先生が作曲した楽譜を私に下さって講演会場で周郷先生に唱って上げることを提案されました。なんとというやさしい、周郷先生の教え子らしい教育者なのだろうと私は思いました。講演の前にPTAの全員が練習して楽しく唱いました。周郷先生は忘れていた遠い昔を思い出したと言われて驚きと喜びをかくせないという表情をなさいました。

平駅で出迎えるの目印に私が赤い大きい紙袋を下げて立っていることを約束しました。特急グリーン車から降りてくる多くの男性の群を目でかきわけながら写真で知っているお顔をさがしました。背のすらりとした気品高い老紳士を心に描いて。

突如「高橋さんかね」と私の目の前で声がして、私の目よりも少し低いところで鋭い瞳が私を見据えていました。土のついた白ズック靴、肩からぶら下げた重そうな古びた鞆は浮世離れしていました。

「電話の声と手紙から美人だろうなんて思わなかったがきつといい人だろうと思ったよ」

これが先生の私への初対面のあいさつでした。私は全身の緊張が一举にはぐれ心が安らかになりました。

「幼児教育」を「人間とは何か」というところから模索し、悲しみ、淋しみ、感動しておられる先生の心がひたひたと波打って私の心に伝ってきたその人、読むごとに私の心が震えたあの本、この本の著者、想像していた姿とは全く異った先生の風貌に出会って、こんどは喜びで心が震えました。

先生は幼な子を現実的によく知っておられたように思います。心理学も哲学も自然界のこともそれは野山の草木の名を憶えることまで幼な子を解ろうとする心、人間を知ろうとする努力からその学問が語られ知識が伝達されていいたように思います。私はその愛に打たれるのです。

お帰りの列車を待つ間のプラットホームで、

「いなかにはまだマリヤ様のような美しい顔の母親がいるね」

と言われました。これが私の耳に残っている周郷先生の地上最後のお言葉です。

(彰栄保育専門学校・平幼稚園)

◇ ◇ ◇

この講演は、今は亡き周郷先生が昨年（一九七九年）十一月七日に、いわき市の平幼稚園でされたものです。園長高橋フミ先生は非常に周郷先生を尊敬されており、また周郷先生もこの時、とても気持ちよく話ができたと思われ、次回を約束されていたそうです。本題に入る前に高橋先生から講演の依頼をお受けになったいきさつを話され、

“高橋フミなんて名前は、平凡で良いですね。あんまりなんか、美人であるような名前がついてると工合悪いね”

といかにも周郷先生らしい語り口の中に高橋先生とのかかわり方を、淡々と話されています。

(赤間)

ぼくは九月に外国から帰ってきて、三十九度四分も熱を出しました。病気で五十日ぐらいは家を出られませんでした。今日は、遠出をしてきて二度目です。そこでまずいいことは、高橋さんとぼくと、ここに集まっている皆さんとは、何か頭の理屈では説明できない縁みなのものでつながってるな、という風に感じて

います。血のつながりじゃなくて、縁みなのもの、ありますね。日本人の中だけでなくてもあるんです。でも、縁というのは、ただ縁があっただけじゃだめです。縁を利用してうまく成功しようなんて思ったってだめね、よくわからない説明のつかないものだけれども、何か意味があって、それによってこちらもむこうも、それが踏み台でもっと高い所に精神的に昇れるみたいなものが縁だと思います。ぼくは病気で経験しましたけれど、精神的なもので人間が高まると、体も良くなることはたしかです。ここは非常に重要な問題です。精神は精神だ、知性は知性だ、体は体で別だなんて考えてるけれども、それは違います。心に何か喜びがおこってくると、それも自分の欲にからだ喜びじゃないんですよ、宝くじが当たったなんていうのじゃなくて、損得利害をこえた魂の喜びがおこってくると、体の調子がよくなります。薬はある助けにはなりますけれど、本質的なものは魂に喜びがあるというところで、それで体のずから体が元気になるということだと思います。

初めからむずかしいことをいいましたが、普通の言葉でいえば“ここからだ”“ここらと物の世界”の関係ということですよ。“mind and matter”心と物との関係です。“こんな話むずかしくて、聞いたようなふりしてる方がいいかな”なんて、思わな

いでほしいな。(笑い)

ぼく、この夏ヨーロッパへ行つた時、胸の中にひとつの問題を持って行つてました。それは女性の問題ですが、これは世界中に非常に大きな問題をもっています。というのは、女性が昔と変わってききましたね、「ウーマンリブ」、昔よりも女の人が楽になつてついでに解放してもらいたいとか、「翔んでる女」とかいろいろでてきました。世の中がどんどん変わつて家庭の生活も変わる、家族はだんなさんと子どもが一人か二人、昔とえらく違うわけです。そして女が職業をもつということもあります。女が大学へ行くようになって、大学へ行かなくても女を相手にした本がいっぱいあります。そして大抵の本は女を甘やかすことを書いてます。そうしなきゃ売れないから……と、つiiiい気になりますね。そういうことが一種の教育なんです。それで何か、少し本を読んだり大学へ行つて勉強したりすると、物がわかつたような気がしてくるのね。少なくとも昔の日本の女性のような状態ではなくなつて「謙遜さ」みたいなものがへつてきます。文字や知識として知つたことは、その役に立たないものです。だけど自分では少し偉くなつたような気になるのね。しかしそれは邪魔物で、ちつとも役に立たないことなのです。

さつき園長室に行きましたら「神は愛なり」という額がかかっ

ていました。この言葉、むずかしいですね。わかりますか？ 神は愛だから何でも許してもらえ、神さまは甘やかしてくれませんか？ この言葉もわかつた気になっちゃいけないの、あれは大変なことなんだから。この言葉一つ覚えてわかつたような気がしてゐるんだつたら、その人は不幸な人です。わかりますか？ これ。

いま世界じゆうで、社会主義の国でも、アメリカやヨーロッパのような資本主義の国でも、女性の問題、それから学校の教育より家庭の問題がとりあげられています。家庭の母親の生き方というか振舞いというか、女性たちの眼差し、顔のことで。顔は化粧すればいいものじゃないんです。資生堂が作ってくれるんじゃないんですよ。昔と違つて今は、だんなさんが帰つてきて仕事に忙しくて疲れてるから相手にしてくれない、そうすると女はひまだから寂しいと思うわけです。昔の女の人はそんなことを考へるひまがなかったの、おまけに男の方はくたびれちゃつて性欲もあんまりないんです。変なこといつてるようだけど、女の人は男ほど性欲が衰えちゃわないんです。するといろんな不満があるわけです。それから、だんなさんとの関係だけじゃなく子どもからも慕われてないんです。がみがみいうせいだけじゃなくて、母親の顔つきが昔のお母さんと違つてきちゃつたの。いつも子どもの方ばかり見てるから、子どももいやでしょ？ 監視されてるみ

たいで。そして、近所でもお母さん同士が仲よくないですね。なんかお互いに本心を言わないで口だけでうまいこといつてるの。すると女同士も、良い友人と一緒に話すという喜びがないもんだから寂しいんです、そして子どもに「もっと勉強しなさい」「これじゃ東大へ入れないじゃないの」とかいうことになります。それじゃ子どもを手段にしているようなものです。そこへつけこんで化粧品やが女の人にいろいろ買わせて塗らたくったもんだから、女の顔が目茶苦茶になっちゃいました。

一方では変な学校教育というのがある、東大へ入らないといけないみたいな、欲でつぶった奴がもみあつてるような、点数かせぎばかりやって日本の子どもと母親の心を目茶苦茶にしちゃいました。だから化粧品をなるべく買わないで下さい。だまされないように。それから、学校の成績や何かにだまされていきり立つのもおやめなさい。この幼稚園は良い幼稚園だけれど、最近の幼稚園もまたよくありません。幼稚園の先生の中でも年とった人たちが若い人たちに意地悪をすることがあります。それと、これは男にもありますが、女がある年齢になると先入観ができちゃって「おやっ」と驚くべきことを聞いてもすばらしい！これはそうだ、私の足りないところだなと気が付かなくなるんです。それと、知識ということがあります。知識があると、私は知ってい

るということ、本当に聞くべきことを聞かなくなっちゃうの。本当は偉い人から聞くよりも、偉くない人がいいことをいつてるんです。子どもなんかでもいいことをいつてるの。それが聞けるっていうのは、先入観や知識があるとだめなんです。子どもは時にびっくりするようなことを言うでしょ？親が批判されていると思うようなことを。だけど、あれは子どもなんだなと思って軽べつしようとするからいけないんです。先入観と知識があるのは当然で、勉強するのもいいことだけれど、自分の狭い知識、自分がつまっている先入観で、自分を故意に進んで狭いものにしてしまふ必要はないですね。

パリで、フランクフルトから来たヨハネスという三十ちょっとすぎの男に会いました。ヨハネスは服部孝子さんというぼくの教え子と結婚して、孝子さんが乳がんで死んでからフランクフルトに帰って一人でいるんです。ぼくは彼のことを心配なのでパリへよんで話をしました。その時の話で、ドイツでも家庭が昔と変わってきたそうです。ただ日本と違うのは、ドイツの男たちが日本の男たちみたいに甘くないことです。日本の男は女がいないと夜も日も明けないといったところがありますね。そしてお父さんも日本のお父さんみたいにフィニッシュじゃなく、キチンとしています。ドイツにはこのごろ、女だけのかけこみ寺、女だけがいる

場所があるそうです。日本の男は、そうなぐるといふことをしません、ドイツの男はそうじゃないんです。そしてこのごろ、ドイツの男はドイツの女が変わってきたんだから、いやになつて、どこかよその国の女と結婚したいと思つてゐるそうです。日本の男はそれほどじゃないですね。

この本は、コロンビア大学のウエイマンさんの奥さん、英子さんが送つてきてくれた本ですけれど、アメリカでもずい分ひどい問題がおこつてゐるようです。世界中、女というものがどんどん變つて、これから先またどう変わるべきかということが問題です。そしてこの變わり方が中途半端な變りかけの状態、世の中が變つちやつたから變つたという受身の状態です。翔んでる女といつても、桐島洋子ぐらゐになるとちよつと魅力があるんですけれど、大抵はいい加減に翔んでいて、翔んだふりをしているんです。教育というのは、初期はお母さんと家庭で行われているわけですから、そこでお母さんが變な方向に變つちやうと（それも世の中の流れに流されて受身で變つていくと）子どもはまともにその影響をうけます。お母さんが口で子どもに言うことよりも、心で思つてゐることの方が子どもに影響を与えます。口でどんなにうまいこと言つても、子どもは動物のようにちゃんと見て、感じとつてゐます。心で思つてゐるだけのことがわかるとい

う、ここが非常に重要なことです。それでしかも悲慘なことは、アメリカでもイギリスでも、子どもを虐待してゐる母親がかなり多いんです。この本の著者が知つてゐる人のことだそうですが、ニューヨーク郊外でかなり良い暮らしをしてゐる家庭で、三歳か四歳の子どもの首を、お母さんがちよん切つちやつたの。それぐらゐ、女の人が何か神経の病氣にかかつていらゐるというこゝとも世界的な現象です。それと子どもの自殺、これは日本も多いけれど、社会主義國、フランス、デンマークなどでも多いです。なぜ自殺をするんでしょう。

去年NHKで、日本体育大学の正木君たちが「子どもの体はむしろ生まれてゐる」といふことを放送しましたね。何か子どもが妊娠中からすでに起こつてゐるかもしれないんだけど——本能が弱つてゐるそうです。本能というのは生命力のことです。その調査によると、子どもの足が弱くなつたこともたしかです。足がちやんと使われないで弱つてきちやうと、頭の働きの弾力がなくなるの、だからぼくは坐つて話するのは大きらいなんです。坐つちやうとぼくの話も坐つちやうんです。ぼくが立つてゐる姿勢がぼくの頭の働きの關係があつて、腰がシャンとしてなかつたらぼくのいつてゐることはいい加減です。もう一つは、足が弱つて

くると心臓も弱ってくるということです。ぼくは心臓は悪いんだけれども、蟲の仕事をやったり歩いたりして足や手先を使っています。あまりやりすぎてもいけません、使わないとぼくの心臓はもっと弱くなります。こういう体の問題が、育児、子どもを一人の子どもに育てる毎日の仕事の中で本当に見直されることが、もっとよく考えられなければいけません。

正木君たちはNHKと相談して、日本中の養護教室の子どもの体がおかしところは、どういう風におかしくなっているかということをも四人ぐらいの養護教師から聞いたところから発展してきたということです。最初に話した「こころと物」ということで、体は物の世界の中にあります。自然や川、宇宙も、星の世界も物です。それらの物と心との関係ということです。正木君がそれを要約していますけれど、ともかく高度経済成長で非常に便利になって、食物は昔のようにあり合せの物を大事に食べるというよりも、やたらにどこから買ってきておいしい物を食べるようになりましたね。着る物だって。そしてバリなんか行くと子どもははだしで遊んでいます。コンクリートじゃなくて石のところで、石段を上ったりして皆はだしで遊んでるの。ところが日本の子どもはみんな靴はいてるのね。靴下をはいて靴はいてるの。それじゃあ足の指が動きません。足だってちゃんと五本の指があるんです

よ。特に親指とくすり指にあたる指、崖なんか上る時はサルミたいに指先まで力を入れるから心臓が丈夫になるんです。

それから、小学生たちは背中がグニャッとしてて姿勢がよくないそうです。腰を境にして足がちゃんと立ってて、しゃんとしてるということは背骨がすつとしてるということです。背骨の中に脊ずい、神経が入ってて体じゅうずつといってるんですから、背中がグニャッとしてて脳だけが良いなんてことはないんです。その人の人柄は、その人が立っている時の姿勢と関係があります。グニャグニャッとした人はやっぱりグニャグニャッとしてます。この調査では、小学校では背中がグニャ、中学校になると朝礼の時にバタンと例れる生徒が出てくる、高校になると腰痛になる“そうです。それから、ころんだ時にも手をつかないということです。ネコの方がよっぽど立派です。これじゃもう、人間として使えないものにならない人間が小さい時からできてしまします。何かごみかとんでもなくても、これは絶対的な反応で眼がパチッとするものなのに、今の子どもは開いたままだから眼に入っちゃうんです。こういうことは教えるものでもありません。子どもが自分の命を守るために神様がくれた本能なんだから、自分できたえていくものです。あんまり手をかけちゃうとそれがだめになります。箸やなんかを使うことだって、子どもは手先を使うということが好き

なんです。それをお母さんは案外やらせないのね。手先っていうのはいたずらもするんです。"なるべくいたずらをしないで勉強しなさい"なんていってできるわけがありません。

ボランスキーという人がポーランドにいて、その人はこういうことをいっています。"体力でも精神的な知力でも早くピークに合ったものは早く落ちてしまう"。ぼくは子どもの時からそういう例を知ってるけれど、小学三年生ぐらいで腕っ節が強くてけんかも強いなんていう子がいますね。でも十四、五になったらどうなるだろう、弱いやつになるの。こういう一つの法則があるんです。

物事を考える力、知力、これが早くピークにきて早くからペラペラおしゃべりして物がわかったようなこといつてる点数の良い子ども、それはもう少しするとばかみたいになるの。近ごろのピークは見せかけのピークです。こういうことで覚悟すると、教育というものはずっと深い意味をもってきて、やり甲斐があるようになります。お母さんの顔だつてよくなります。変ないらだつた欲心を切ることなんだから。アインシュタインなんかも無口で、親は馬鹿だと思ったそうです。子どもが無口であるということは考え深いということなんです。そうでない場合もあるけれど(笑い)そこをちゃんと見分けなきゃいけないの。子どもは生れてきて大

人を見ると、子どもは真面目に見えますからもうしゃべれなくなるの。よく考えてからあとでいおうと思つてだまつてる。それを早く言えなんていつちやいけない。それを、わからなくてもべらべら言っちゃうような子どもにしちゃうと、宝物をこわしちゃうようなものです。考える力があるのに。昔の日本人は、中国でも言われていますが、大器晩成という言葉で全体をキャッチしています。そういうことの中味をボランスキーなどが研究しているのです。

もう一つ、今の学校制度っていうものは自民党と同じようにもうだめなんです。今の学校は、子どもを少なくとも受身の立場にしています。勉強しなさい、と子どもはいじめられてるんです。勉強は、遊んだり竹とんぼを作ったりするのと同じに自分でやることです。やらないとまともな人間にならないとか、世の中から爪はじきになるという脅迫で勉強すること、勉強ですか？　そういう意味では今は、恋愛さえもできないようにしています。人を愛するというのは簡単にはできないことです。今、テレビで恋愛遊びみたいなものをやっていますが、あれは愛し合ってるのでも何でもありません。受身でそういう遊びをやってるんです。愛するということはえらい決心がいるものです。ぼくは若い時分から、新約聖書の中のイエスさまの"人その友のために命

を捨つる、それは大いなる愛なり”という言葉が好きです。世間でいう愛とちょっと違うでしょう。友情という言葉の方が、いろいろとかかわりあいがあるって、サラッとして汚れがなくて、この友情こそ不安定な頼りになる物のない今の時代に最も重要なものだと思います。

先生が子どもに教えるといっても、どっちが先生なのか、子どもが先生かもしれません。親も先生も、有利な地位を利用して子どもを手段として教育したりしてるわけです。教育というのは、教育する人が上から教えるというようなものじゃなくて、親も先生も子どもと一緒に救われなければならないのです。明日がどうなるかわからない時代に、親も先生もノイローゼや情緒不安定の人がけっこう多いんです。自分のことは棚に上げておいて、お母さんは完全な人間だというような顔をして、子どもを救ってやるうなんていう、見えすいた軽薄な態度をとらないことです。学校の先生だって救われていません。俸給が出ていることをいいことにして、私は先生でお前は生徒だなんていつてるけど、どっちが先生でしょうか。お金の奴れいと、まだお金のどれいにならない子どもと、どっちが人間として立派ですか？ 今年の夏、オランダのランゲフェルトさんが日本へ来て話をするはずでしたが、その題は“よるべなき父母”という題でした。父母というものもこ

の時代、よるべになるものをもっていないんです。親も子も、体のまともな人も障害者も一緒に救われなければならない、ということが今の教育の根本の問題です。

次に、アドリエンヌ・リッチさんの本について話します。この人はアメリカの人で未来詩人なんですが、初めてこういう本を書きました。アメリカでも女性と母とがどういう風に生きるかということが重要な問題になっています。昨夜増井光子さんという人がテレビでライオンの話をしましたね。増井さんというのはなかなか面白い人でしょ、サッパリした。上野動物園の獣医さんです。その話によると、ライオンの牡は役に立たないですね。牝がほとんど全部やつてるんです。牝がとってきた餌を牡は食べてるんです。この本を読んだとやはり男っていうのはけっこうなものです。これはヨーロッパから始まるんですけど、父性社会、ギリシャなんているのは女なんかに問題にしない生活です。この本の題名“Of woman born we everyone of us”あらゆるものは女から生れた。そして女の世話にならなきゃ人間になれなかった。男は戦争なんかしてましたけれど、負傷者なんかは全部女が世話しました。その間に子どもの世話もして、食べる物も一生懸命作りました。男って、何してたんでしょう。この本にも書いてありますけれど、女がやるべきことがもっとはっきりしてくると、人間の

生活は変わってくる。かつて女はそういうことをやっていました。東洋、アジアというのは母性文化です。女、母性というのはいろいろと包みこみ、男はこれを分解してさばくものです。そういうものを総合して包みこむように命というものを育てていくのが母性文化なんです。キリスト教には両方の文化があるように思えますけれど、教会へ入ると左側にまずマリアさんがいるわけです。そこをろうそくがともって、このマリアさんの仲だちをへてイエス様のところへ行かなければならない。じかにイエス様のところへ行っちゃいけないんです。

まずこの本は彼女の一九六〇年の日記から始まっているんですけど、六〇年十一月最初の書き出しは次のようです。

“私の子どもたちは、どうにも逃げ隠れもできない辛い仕事を私のところへもってきた。私はそういう辛い経験というものについて、前もって何の経験もなかった”それから、

“子どもを育てるということは、やり切れない辛さ、神経の内側をえぐられるような『いやだ!』という気持ちと、天から恵んでくれた恵みのような子どものやさしさ、それが交互にゆれ動いているような辛い経験”だと書いています。“それを、娘時代から一人の女性が母になった瞬間にはなお、この辛い経験によって母になっていく”これを楽しなものにするためなんです。この経

験を自分の物にした時に初めて母らしいものが出てくる、と彼女は書いています。そして“女性の中にはまだまだ人類の歴史上、女が発揮できなかった能力があるはずだ、甘やかされて出てこない魅力がある”というのが、彼女のこの本の魅力なんです。

お母さんがこの辛さに耐えていく、この辛い経験の中から女性がもっている非常に良いものが現われてくる、ということがお母さんの喜びであるはずです。ティアル・ド・シャルダンのパンセの中にでてる“永遠というものがある。今日明日のことだけではない”という、何か信じ得るものとぶつかるのだと思います。

そしてお母さんや家庭のふん囲気が変われば子どもは変わってきます。そういうことが今、世界じゅう、社会主義国も資本主義国も含めて大きな問題になってきています。制度化された学校というのは、権力者の都合によってできるものですが、親子関係、家族が友情で結ばれているということは、永遠の相をおびています。学校制度などという一時的なものと永遠的なものをちゃんと見分けて、覚悟をして教育に接していくことが大切です。

のら猫が去年家の物置きで赤ん坊を生みました。母猫が病気になるって、生れた子どもがみんな眼が開かなくて、医者頼んだら七千円ぐらいとられました。三四のうち二匹は、子どもがよく遊

びに来る芝生の所へおいておいたら誰かもって行ってくれましたが、のら猫はみんな人相が悪いですね。一匹はうちの隣の女の子がほしいといって、隣で飼われています。白と黒のまだらで、サブという名前で育てられています。母親の方もら猫だから何となく可愛げがないです。何かこう縁の下にもぐって、眼だけこっちを見てるといような、にくらしいのね。でも一度うちで遠くへおいてきたけど帰ってきちゃったので、諦めて何かうちで食べさせています。そしてほくだけだとガラス戸のそばまでくるの。男の方が甘いと思ってるらしい。(笑い)隣へ行った子どももサブも家へしばしば遊びに来ます。でもこの二匹を見ると、子どもの時可愛がられなかったのと、可愛がられるのでこんなに違うかと思えます。猫の親子を見てると人間のことがよくわかります。このごろは母親の方も甘えたいらしくて、夕飯なんか食べてるとよって来ます。でもちょっとでも音がするとすぐ縁側の下へ入ってしまう。サブは全然そんなことはしないし、遊ぶことが上手です。若いせいもあるでしょう。動物行動学から人間を見るということは大変面白いですけれど、ぼくが最近読んで面白かったのは、グリシンという人の書いた「動物に心があるか」という本です。ロックフェラー大学の人ですが非常に面白い本です。ノーベル賞をもらったロレンツという人もいますが、動物の

方から人間を見ると人間のことがとてもよくわかります。

それで、うちの三毛とサブの行動の違いを見ても、簡単にいえば、あとまで可愛がられなくてもいいけれど、小さい時に可愛がられた、生れてきた初期に、生きるといことを信じられるという心をもったのと、それもちそになったのではえらい違いがあるといことを、教えられる気がします。小さい時、学校へ入ったらもうだめです。そのころに、大事なこと、つまり生命の方向、ヨーロッパの人は方向トヌスといえます。生命のはりの深さトヌスです。生きる力の弾力、そして回りを疑っていない、ちゃんとした判断ができる。小さい時には、何の意識もなく子どもはそれを感じるものです。うちの猫の行動を見てつくづく考えたことですが、もう時間になりましたので終りにします。

